

目的とした。

日用品として指輪、ピアス、ネックレス、腕時計、化粧品を、また歯科用材料として、歯科用金属、合成樹脂材料、コンポジットレジン、根管充填材、合着用セメント、仮封材、仮着用セメントの合計69品目を選択した。これらの試料を対象に本院金属アレルギー外来で行ったパッチテストにおいて高頻度でアレルギー陽性反応を認めた、ニッケル、パラジウム、クロム、コバルト、スズ、水銀、モリブデンの各金属元素の含有率について調査した。分析は島津製作所製、蛍光エックス線分析装置 EDX-900HS を用い、10 mm のコリメータで大気中で行った。

歯科用合金にはアレルギー陽性率の高いニッケル、パラジウム、クロム、コバルト、モリブデンを含むものが多く認められた。またニッケル、クロムはアクセサリや腕時計などの日用品においても高い頻度で含まれていた。

顎機能診査における下顎運動範囲の計測法に関する検討

○矢吹 明子、井口 七穂
吉田明日香、山本 修史¹
野口 直人²、石川 輝明³
佐藤 裕⁴、竹内 久裕⁴
中野 雅徳¹、坂東 永一¹

徳島大学歯学部 4 年次

¹徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部

咬合管理学分野

²徳島大学医学部・歯学部附属病院総合歯科診療部

³徳島大学医学部・歯学部附属病院高次歯科診療部

⁴徳島大学医学部・歯学部附属病院歯科

顎関節症患者等に対して開口量などを簡便に測定する方法として、定規、ノギス、開口度測定器などが用いられているが標準的な術式はない。15センチメートルの金属製定規を用いて下顎運動範囲簡易計測法標準化のための実験を行った。医局員、歯学部学生の中から任意に選択し同意の得られた有歯顎被験者32名（男性16名、女性16名）の上下顎中切歯切縁間距離から求める最大開口量、上下歯列の正中を基準とした側方最大移動量、および水平的被蓋を利用した前方最大移動量を計測した。測定は、1人の術者が十分に熟練した後に行った。これらの測定結果と同じ被験者の磁気空間を利用した6自由度顎運動測定データとを比較した。最大開口量にオーバーバイトを加えて補正した開口量と顎運動測定器で測定した最大開口量には差が認められなかった。一方、左右側方および前方の最大移動量の定規による計測値は顎運動測定器での測定値よりいずれも有意に小さかったが両者

には高い相関があった。これらを踏まえて標準的な下顎運動範囲計測法を提案した。

頬隙と犬歯窩隙の局所解剖構造

○藤井 克昌、高瀬 雅大
前田 彩、角田 佳折¹
森本 景之²、北村清一郎¹

徳島大学歯学部 4 年次

¹徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部

口腔顎顔面形態学分野

²産業医科大学第2解剖学教室

頬隙は頬部皮下組織と抗菌一頬筋間の頬脂肪体より、犬歯窩隙は上唇挙筋一口角挙筋間の脂肪組織より構成される。顔面の皮下組織は、表情筋とそれに続く浅筋膜で浅層と深層に分けられる。頬部皮下組織の浅層の部は厚く、浅筋膜である浅顔面筋膜の表層に位置する。浅顔面筋膜より深層では、皮下組織は咬筋前縁部付近から頬筋表層を占め、上方は、やはり深層の部の犬歯窩隙に続く。深層の部のさらに深層に頬脂肪体があるが、耳下腺管より内側かつ後方にあつて薄い膜に包まれる。頬脂肪体は、咬筋一頬筋間を埋める主部と、主部から咬筋前縁を挟んで後方に折れ返る、咬筋より外側の部、主部から上方に伸びる側頭筋より外側の部、および主部から側頭筋前縁を挟んで後方に折れ返る側頭筋より内側の部に分かれ、咀嚼筋間に複雑に入り込みつつ、下顎枝前縁を囲むが、側頭筋内面や外側・内側翼突筋の外面を覆う深筋膜よりは外層にあり、皮下組織の続きとみなされる。